
アトラクション

光琳寺 凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アトラクション

【NNコード】
N1469D

【作者名】
沐浴寺 凪

【あらすじ】

ある日私は友人の治子と遊園地に行つた。しかしそこで待ち受けていた物とは死のゲーム。果たして二人は生きていられるのか！？

一千××年×月××日……この日は何の日か分かりますか？この日は私にとって忘れられない、忘れてはいけない日だ。

その日、私、木倉可憐は友人の治子と一緒に東京の中心部にある遊園地へと行つた。朝早くに起きたかいがあつて着いたのは開園前で、入口には数名しかいない。那人達は皆、私達と同じ目的で早くから来ているのだろう。

「イータランド楽しみだね」前にいる小さな女の子とそのお母さんが話している。やはり目的は私達と同じイータランドだ。

イータランドとは大人気のアトラクションだ。エレベーター式の部屋に入るとそのまま部屋が上がりしていく。そして一番上まで着くと一気に急落下するのだ。

「そんな物が？」と思う人がいるかもしだれがこれに乗るには一日一百枚限定のファストパスを手に入れなくてはのれなく、ファストパスのために皆が私達のように開園前に入口に並ぶのだ。

やがて入口が係員によつて開けられると、私達はイータランドに向かつてダッシュする。

「キャッ！」後ろで治子が悲鳴を上げる。誰かにぶつかつたのだろう。

「治子、早く！」

ようやく私達はイータランドの前に到着した。しかしいつもはいるファストパスを配る係員がない。

「可憐、あれ見て！」治子の指す方向には立て看板がある。

『本日イータランドは午後一時からの開始となつております。午後一時に再度いらっしゃって下さい』

「ええ、せつかく朝早く起きて来たのに」治子がその場に座り込む。

「ま、午後一時に来よー。」

そして私達は午後一時までいろいろなアトラクションに乗った。イータランドが開いてなかつた時の事なんて忘れてワイワイ樂しく午後一時までの時間を潰す。

そして午後一時・・・私達はイータランドまで朝同様ダッシュで行く。イータランドに着いたがやはりファストバスは配つていな。しかし私は入口が開いているのに気が付いた。

「きっと今日はファストバス無しの入場なんぢやない?」私がそう言つた時だつた。

ピーン、ポーン、パーン、ポーン・・・。

「当、遊園地に御来場の皆様へ申し上げます・・・。ただ今から、ゲームを始めたいと思います!ゲームとは、仕掛けの施された各アトラクションに乗り、全てをクリアーして下さい。クリアー出来なかつた場合・・・そこには死が待つてゐるのでご注意下さい!」死が待つてゐるという言葉が頭の中でリフレインする。同時に早くここを出ようという気持ちが込み上げて來た。

「ちなみに、今からの入退場は出来ません。無理にでも出たり入ったりしようとする場合、命の保証はありませんのでご注意下さい」ピーン、ポーン、パーン、ポーンという音と共に場内アナウンスが消えた。

「死んでたまるかあ!」皆が口々に言つ。そして一人の男がついに行動に出た。入口目掛けて突進したのだ。

しかし男は呆氣なく取り押さえられ、地面に叩き付けられた。やがて一人の係員がやつてきた。手に何かを持っている・・・。バチバチと音が鳴る。スタンガンだ!そして男の首元にスタンガンを持って行き・・・。

それから皆は逃げる事を諦めたようだ皆の歩は、次々にアトラクションへ向かう。私はとりあえず、近くにあったコーヒーカップに乗り込む。コーヒーカップに乗ると係員に

「最後まで無くさないで下さい」と言われた。そしてクラクションが鳴り響き、ゆっくりとコーヒーカップは回つていく。

一回、二回、四回と回るうちに私は違和感を感じた。

「ねえ治子、何だか早くなつてない?」私はなんだか回転が早くなつているように感じたのだ。

「そんな事ないんぢやない?でも安心したよ、いきなり変な事言われておまけに人まで死んぢやつたんだもの!でも全部きっとお芝居だつたんだよね?」最後の方は確信では無く願望であつたのだろう。言い切つた割には全く安心していない。その時、いきなりコーヒーカップが止まつた。

「お、終わつたの?」思わず安堵する。しかし神様は私達を見放した。再びコーヒーカップが回り始めたのだ!しかも超高速で。

「キヤー」と周りから悲鳴が聞こえる。あのアナウンスが言つていたクリアーとはこれにたえろという意味なのだろうか?

ピーン、ポーン、パーン、ポーン……。コーヒーカップにあるマイクからアナウンスが……。

「このコーヒーカップは、一組以外のカップに乗つた方全員が気絶するまで回り続けます。なお、残つたカップの人は次に進んでいただき、気絶してしまつたカップの方は直ぐさま領収所へ連行し、死が待つてますので」注意下さい」そしてまたピーン、ポーン、パーン、ポーンと鳴り、アナウンスは切れた。

私が周りを見渡すと、隣のカップの人はもう気絶しているようだつた。

「私……もう、駄目かも……」あれから一十分が経つただろつか、突然治子が言い出す。私が治子の側によつてみると治子は首をがくがくさせ始めた。

「可憐……可憐は、生き残るんだよ……」不意に治子が言

い出したので私は

「きっと助かるわよ！あんなのただの悪戯よ！」と言つた。しかしそうは言つたものの私の頭では逃げようとして殺された男の事を思い出してしまう。同時に「これは悪戯で済まされるようなものじゃない。これは立派なテロ行為だ！つまり私達はそれに従うしかない」と不安が湧き上がる。

「ただ今、三カップを切りました！」アナウンスが流れる。あと三カップ・・・・私達を入れないと一カップ。

「ただ今、一カップが脱落しました。あと一カップです！」五分後、遂に残るは一カップとなつた。自分と相手のマンツーマン。

「治子！後一カップだけよ！頑張つて！」小さい頃から私は鉄棒の空中逆上がりばかりやっていたせいか自然と全く気持ち悪くならな
い。

「ただ今優勝が決まりました！」コーヒーカップが止まつた。日は既に傾いている。夜になつてしまつたが、どうするのだろうと思つていると「次に行かないと死ぬよ」と、係員に押されたので一夜通しでやるのだろう。私はそんな事を考えていたが治子は限界のよう
で地べたに寝転んでいる。

次に私達が向かつたのは船に乗つてシューティングゲームをするガンテズナイパーという3Dメガネをかけて映像の敵を撃つゲームに行つた。しかし撃つだけならいが敵が攻撃をしてくる時があり、攻撃を受けると船がそれに応じて動き、怖いのだ。しかし、今回は3Dメガネをなぜかかけなかつた。おまけにいつも渡されるはずの光線銃は渡されず、本物の銃らしきものと弾が渡された。

「可憐、」、「これって本物なんじゃ・・・・？」

「これは一見本物に見えるがモデルガンなんだ！」直ぐ前にいる男

が言った。

「オレ、慎也ってんだ！よろしくな！」

「わ、私は可憐。そしてこの子が……」

「は、治子です！」私は治子がまだ引きずっているのかと思つたがこれなら問題無いようだ。

「慎也さんはいくつですか？」

「十六だよ！」

「高校生ですか……」

「そうだよ！痙攣高校さ！」痙攣高校とは平均偏差値70代の学校である。彼らの知能を見た人々が痙攣する事から痙攣高校と名付けられたらしい。

「そろそろみたいだ……」前を見ると三つ前に三人掛けの船に乗り込む人の姿があつた。

「君達とは同じ船に乗るみたいだね！」

遂に私達三人の番が来た。

「いよいよだね……」それが合図にでもなつたのかそれと同時に動き出す。

中に入つて行くと、鼻にシンとする臭いがした。

「血の臭いだ……」慎也さんに言われて下を見るとブカブカと腕が水面に浮いている。下を覗いていると何かがいる。

「危ない！」私は慎也さんに引き込まれた。

「何するんですか！？」と言うと慎也さんはあれ、とさつきまで私のいた場所を指す。そこにはワニの姿が……。

「なるほどね……」

「何ですか？」

「このゲームのルールだよ！」

「私も分かつたわ！普段は映像の敵を光線銃で撃つのだけれどもここでは本物の猛獸と戦うのよ！」

バーチャルモンスター

「頭がいいね、治子さんは！」慎也さんに言われ、治子はちょっと得意そうだ。

「まずはこのワードを撃とうかな・・・」そして慎也さんはモーテルガンに弾を詰める。

「あら？ 陸地になつてゐる・・・」

あれから私達は荒れ狂つワード達と撃ち合つた。しかし進むつむじでなぜかいつも無い陸地が有つた。

「やはりここは改造されているらしいな・・・」仕方なく私達は陸地に足を踏み入れる。

「助けて下さい！」しばらく歩いていると牢屋のよつな場所に閉じ込められている人を見つけた。

「どうしたんですか？」

「あ、ああ・・・私はこの遊園地の管理人なんだ！」一日前に『TザクHAK』と名乗る奴らやつて来て私に一日後にここでイベントをしたいと思つていると言つて来たんだ。それで私はそのイベントの企画書を見たんだ。しかしその内容が大変なものでな・・・」

「十分分かりますね」慎也さんは嫌みらしく言つた。

「ああ、分かっているな・・・どうやらTHAKの奴らは本氣で実行したみたいだからな・・・」

「企画書にはなんと書いてあつたのですか？」

「一千××年×月××日にこの遊園地で命をかけたゲームをすると言つのだ。ゲームのプレイヤーはこの遊園地に今日来ている人全て。ゲームのルールは改造されたアトラクションを全てクリアーした者。期間は三日間でその間に全てクリアー出来なかつた者は全員殺すというのだ・・・そして今日朝私が起きるとここに閉じ込められたのだ」

「そうですか・・・ここに遊園地にはアトラクションがいくつありますか？」

「三十五つだ」私達はとりあえず（慎也さんは分からぬが）二つのアトラクションを見た。つまりまだ三十三はやらなくてはいけない。

「ガルルルルル……」後ろで何かの泣き声がする。私はそつと後ろを見た。

「ら、ライオン！？」私達の後ろにはライオンが目を光らせている。「何！」慎也さんがモデルガンを撃つ。が、ライオンの動きはそれよりも早く治子を取り押さえる。

「か、可憐助けて！！」

「ま、待つてて！」といい私も銃を構える。

「今だ！」慎也さんの合図で私は引き金を引く。

バン！重たい音がしてガスガンから弾が発射される。しかし私の弾は大きくそれで遠くに生えている木に当たってしまった。

「ギャウ！」ライオンが悲鳴を上げる。慎也さんの弾が当たったのだろう。

「やった！」そう思った。しかし全然よくない結果を私は目の当たりにする事になった。

「グルルル……」怒ったライオンは私に向かつてジリジリと歩を進めていく。

「ギャオ！」距離が一メートル位まで追い詰められた時だらうか、ライオンが私に向かつて飛び掛ってきた。私は思いっきり目をつぶる。痛みは無い。私はそつと目を開ける。

「し、慎也・・・・・さん」私の目の前にはライオンに腹を掻き分けられた慎也さんと血だらけになり倒れているライオンの姿があつた。

「慎也さん！しつかりしてください！」

「慎也さん！」「治子も側に来てひたすら慎也さんの名を叫び続けた。

「二人とも・・・・・最後まで生きるん・・・・だ」そしてこれが

私達の最後に聞いた慎也さんの声であった。

「出口よ！」「目の前には大きな穴が開いていて外が見える。

「慎也さん・・・・・」治子がつぶやく。

「治子、慎也さんのためにも最後まで諦めないわよ」「当たり前じゃない！」

空はもう真っ暗。私はじめじめとした夜風に不気味さを感じた。「どうぞ」後ろから係員が「一ヒーカップの時に貰った紙と同じような物を渡しててくれた。

「どうとつけが最後になっちゃったわね」

今私達の手には三十四枚の紙がある。この紙はこれらのアトラクションをクリアしてきた証なのだそうだ。残るは一枚。この遊園地で一番恐ろしいといわれるイータランドだ。

「行くわよ・・・・」

「ええ・・・・」そして私達はイータランドへ歩いていく。

私達がイータランドの中を歩いていくとやがて一つの部屋にたどり着いた。部屋は狭く椅子が四つ取り付けられているだけ。ここからがゲーム開始だ。

私達が部屋に入り、扉が閉まるときガコンといつ音と共に体に圧力がかかる。

「只今、頂上にきました。高さは高度六十メートルです」アナウンスが流れる。

「今からがゲーム開始です。取り付けてある椅子に座り、シートベルトを締めてください」

私達がシートベルトを付けるとまたアナウンスが流れた。

「今からこの部屋は壁という壁が全て外れます。しかしシートベル

ようやく地面に着いた。

「よかつたね……治子……」と、横を見た。しかし横には

首の無い治子がいる。そう……ルルルはルルだ。

「和は憎也の器のよ」治子、治子、治子、治子、治子。

「おお、いいやつだ。おお、いいやつだ。」

れる。

「これでタイムアップとなりました。これから紙の確認をします。全てのアトラクションをクリアーした方、三十五枚の紙をお持ちの方は入り口まで来てください!」

私は入り口に向かって歩を進める。死んでいった皆の思いを背負つて。

「全て集まりました」私はそう言って入り口の係員に全ての紙を見せる。

「OKです。これから閉会式を始めますのでイータンクの前に行つてください」

イータランドの前に着くとそこはまつせまでの雰囲気とは打って変わり色とりどりの飾りで飾られていた。ふといータランドの係員を見つけ、田で会図を送る。

「それでは、閉会式を始めます。まず、企画考案者THAKさんのお話です」これじゃあ小学校の朝会と同じだ。

そしてTHAKの話が終わり、生還者の発表がされた。

「木倉可憐さん、山田達也さん、前の表彰台へどうぞ……」私は階段を一步一步確実に上る。

「生き残った感想はどうですか?」

私はTHAKの方を向く。

「THAKさん」

「何だね?」

「死んでください」パン!と辺りに銃声が響く。

あの時、私はイータランドの係員にTHAKを殺してくれと頼まれ、本物の銃を渡された。これで殺されたって私に悔いは無い。何せ皆の仇を伐てたのだから。

そして私は血にまみれて地面に崩れて行つた。しかし私を殺したのは係員でなく私と同じく生還者の山田達也だつた。

「何故……?あなたは……」そこで力尽きてしまつた。

私は今から行くからね、治子……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1469d/>

アトラクション

2010年10月8日15時07分発行